

池田文書の研究(58)

著名人の書簡(経歴判明の人を含む)(その8)

池田文書研究会

[262] 山崎直胤の書簡(前承)

7 明治 年5月22日 (2949)

拝啓、此書奉呈候婦人ハ小生存知之者ニ御坐候
処、先頃中より大先生之御配剤相願居候由、然
病急回復も六ヶ敷様子ニて本人之兄弟等至極
心配仕居候、乍然発狂等ニ変化いたし候様之義ハ
有之間敷哉、御服蔵御申聞奉願度、其辺宜小生
より相願呉候様囑托ニ付、乃チ本書相渡シ何分御
垂憐之程奉願候、匆々頓首

五月廿二日

直胤

池田先生 侍史御中

らず尾羽にも此の如きもの多数ある様に見受け候
間、之れは御訂正願ひ候、標本は博物館宛に送還
致し候間、左様御承知願ひ候、先づは要用のみ此
の如くに御座候、敬具

十二月十五日

山階芳麿

池田真次郎殿⁽¹⁾

(別紙)

一、表の誤りは正して置きました。

二、Sp.no.30の白化物は日本産なる事疑ふの余地
がありませんからno.4と合併するがよいと思ひ
ます。

三、Anser erythropsの内1個(多分no.240)はBranta
b. hrotaと共にMunsteehjelonより贈られたもの
であると記憶して居ます。同氏より贈られたも
のは其の由附記を願ひます。又博物館には此の
表に出て居ない厚白別産(12.X.1891)のAnser
erythropsがあります。記述漏れと思ひます。

四、博物館にはシジフカラガンBranta canadensis
leucoparciaの標本があります。(Hakodate 24, 25,
X1.1877)。記述漏れと思ひます。

五、博物館にはBranta bernicla nigricansの標本は
少くも三個ありました。記述漏れと思ひます。
以上再調査を願ひます。

以上

[263] 山階芳麿の書簡

山階芳麿は明治33年山階宮麿齋王の次男とし
て生まれる。理学博士。山階鳥類研究所設立し理
事長。侯爵。平成元年没。享年89。(1900-1989)

1 昭和9年12月15日 (2959)

(封筒表) 北海道札幌帝国大学農学部

動物学教室 池田真次郎殿

(消印 9・12・16)(切手3銭3枚)

(封筒裏) 十二月十六日 東京渋谷区南平台町

山階芳麿

拝啓、延引乍ら札幌博物館の標本の調査を完了致
し候に就き、結果を別紙に認め同封致し置き候間
御覧願ひ候、原稿にあるミスは気付き候ものは正
し置き候も猶ほ御注意願ひ度候、次にオシドリ
にて気付き候が風切の充分伸長を遂げ居らざるも
の、測定を完全なものと同様に記載致され居候
が、之れは後に非常な誤りを生ずるものと相成る
恐れ之れあり候故、此の如きもの、測定は全く掲
げざるか、又は125+Xと云ふ様な式に書きて完
全なるものと区別せらるゝ事必要に候、翼のみな

(1) 池田真次郎 池田謙齋の孫(長男秀男の次
男)。明治43年7月生まれ。北海道帝大農学
部卒業。農学博士。昭和5年男爵位を継ぐ。
昭和36年5月没。享年70。(1910-1981)

2 昭和10年7月8日 (2960)

(封筒表) 東京市杉並区西田町一ノ七三

池田真次郎殿

(消印 渋谷 10・7・8 后0-4)(切手3銭)
 (封筒裏)七月八日 渋谷区南平台 山階芳麿
 拝復、御手紙及び原稿拝見致しました、校正刷の方
 は拝見の結果、誤植及び原稿の誤りとも訂正して
 置きました、猶ほ63頁の37日、65頁の××月
 などは誤りと思ひます故御取り調へを願ひます、
 見事な写真一葉有り難く頂戴致します、今夏は如
 何御過しになりますか、小生は時折富士へ行き
 たいと思つて居りますが、大体片瀬の海岸で過
 す積りで居ります、酷暑の折から御自愛の程祈り
 上げます。

七月八日 山階芳麿
 池田真次郎殿

[264] 山田^{あきよし}顕義の書簡

山田顕義は明治前期の陸軍軍人・政治家。顕義
 の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』下巻に
 5通、日本医史学雑誌第57巻第4号に1通掲載に
 付省略。

[265] 山内^{やまうち}容堂(豊信)・豊^{とよのり}範家扶の書簡

山内容堂(豊信)は旧土佐藩主。容堂の書簡は
 日本医史学雑誌第55巻第4号に1通掲載に付省
 略。豊範は容堂(豊信)の養嗣子。旧土佐藩主。
 豊範家扶の書簡は日本医史学雑誌第55巻第4号
 に1通掲載に付省略。

[267] 吉井^{ともぢかね}友実の書簡

吉井友実は明治期の官僚。友実の書簡は日本医
 史学雑誌第57巻第4号に2通掲載に付省略。

[268] 四辻(室町)公康の書簡

四辻(室町)公康は公家華族。日本医史学雑誌
 第54巻第4号に1通掲載に付省略。

[269] 芳川^{あきまさ}顕正の書簡

芳川顕正は明治期の官僚。顕正の書簡は日本医
 史学雑誌第57巻第4号に4通掲載に付省略。

[270] 吉原^{しげとし}重俊・重成の書簡

吉原重俊は弘化2年薩摩藩士家に生まれる。明

治5年岩倉使節団に随行。11年11月租税局長の
 時フランスへ出張。大蔵少輔を経て明治15年日
 銀総裁となる。明治20年12月19日没。享年43。
 (1845-1887)。重成はその息子。

1 明治 年9月12日 (3022)

(封筒表) 浜町^(ママ)老丁目⁽¹⁾ 池田謙齋様 伝史
 吉原重俊

(封筒裏) 〆

御安康之筈奉賀候、昨日は御光越被下候由之処、
 折悪敷不在にて残心ニ存候、次ニ拙生ニも御高蔭
 ニより殆と全快ニ立至り仕合ニ存候、然し猶此際
 ニ乗し取切療養致し置度候ニ付、御都合を以て御
 光臨被下度、尤水菓も引続き相用候て不苦義ニ候
 得バ尚又御投与被下度、夫是御願迄、草々如此御
 坐候、不具

九月十二日

(1) 池田謙齋は明治11年3月19日まで浜町1丁
 目に住む。

2 明治11年9月20日 (3019)

御安康奉賀候、然バ拙生今般仏国⁽¹⁾え出発ニ付、
 明廿一日芝離宮ニ於て御暇乞として午餐差進度、
 就ては御繁用の所御間隙も御坐候ハゞ、是非同刻
 より彼方え御来車被下候ハゞ多幸の至ニ存候、右
 為得御意候、草々如此御坐候、拜具

九月廿日 吉原重俊

池田謙齋様 侍史

追啓、御来否之御都合鳥渡御知被下候ハゞ仕合
 ニ奉存候

(1) 明治11年松方正義等と共に不平等条約改
 定交渉の為フランスに赴く。

3 明治 年7月27日 (3023)

(封筒表) 池田謙齋様 別包相添 吉原重俊
 (封筒裏) 封

炎暑之時分益御清康之筈奉賀候、然ば別包伊太利
 酒六本粗盆二枚、近比輕微之品ニ候得共暑中御伺
 之驗迄進呈仕候間、御笑留被下候ハゞ多幸ニ存

候、右迄草々如此候、拜具

七月廿七日

重俊

池田先生 机下

追白、拙生にも大抵来月一日比より箱根え出向致度候、何卒其前御都合を以て御立寄被下度奉希候也

4 明治25年12月 日 (3021)

拜啓、亡父重俊五周年祭相当ニ付、籠末之鏡餅申附候間、晋呈致度御受納被下候ハ、本懐之至ニ御坐候、匆々拜具

十二月

吉原重成

池田謙斎殿

[271] 若山儀一の書簡

若山義一は明治期の経済学者。日本最初の生命保険会社 日東保生会社の創設者。天保11年生まれ、明治24年9月3日没。享年52。（1840-1891）

1 明治 年11月2日 (3035)

拜啓、尔来寒暄未定候得共、益御清安被為渡奉肅賀候、扱 老母事種々御配慮相願候へ共、稍々衰弱ニ趣き、加ふるニ患部之疼痛依然不相退、最早迎も全快ハ覚束なく相見へ候得共、猶一回何卒御臨診奉願候、將御多繁之中へ申上候も何共恐悚之至御坐候へ共、小生此頃原告となり訴訟する所有之候に、代人を出候にハ老母之病を申立候手筈候ニ付、乍御面御診断書一通御認御投与被下候様奉希度、尤右は明後四日朝必用ニ御座候間、明夕までに御筆勞奉願上候、紙ハ半紙可然ト奉存候、其中拜晤事情委曲可奉申上候、差声乍失敬以書中奉懇祈候、猶御屈駕も奉仰候也、草々頓首拜具

十一月二日

若山儀一

池田賢国手 侍曹

2 明治 年2月26日 (3198)

拜啓、尔後絶て御疎闊ニ打過申候、御満堂愈御多吉奉恭賀候、陳は荊妻妹先月下旬比より鬱憂病ニ係り、一時ハ狂状ニ陥り候次第、其後桜井氏ニ診回を受居候へ共、未タ特驗も無之、四五日来頻りに睡眠のミにて殆ント昏睡ニ至らん歎之恐も有

之、何卒国手ニ御診断ヲ奉願度一同申出候、右ニ付昨日昇堂仕候得共、御他出中不得拜青、依て乍失敬以書牘此段奉懇願候、御多用之処恐入候得共、御退省節にても一寸御臨診奉希上候、草々頓首拜

二月廿六日

儀一

池田大国手閣下 侍史

[272] 渡邊洪基の書簡

渡邊洪基は明治期の官僚。洪基の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』下巻に2通掲載に付省略。

[273] 渡邊千秋の書簡

渡邊千秋は明治・大正期の官僚。千秋の書簡は日本医史学雑誌第57巻第4号に1通掲載に付省略。

[274] 渡邊 央の書簡

渡邊 央は明治期の陸軍軍人。陸軍教導団団長、青森歩兵旅団長等を勤める。天保8年生まれ明治27年9月9日没。享年58。（1837-1894）

1 明治 年2月1日 (3050)

拜啓、益御多祥奉賀候、倅虎次郎近日之病状ハ中井氏より御承知被下候義にて、何分由々敷無之心配罷在候、迎ても難症とハ承知仕候得共、猶御来診相願度、就ては明朝拜芝昨今之容体申上度、御在館之御都合奉窺度、否貴報為御聞可被下候、拙詞草々拜具

二月一日

渡邊 央

池田様

2 明治 年2月3日 (3152)

過日は御 憤 来被下難有奉万謝候、留守にて失敬仕候、尔後病人も先ツ相変候義無之、実ニ難症困却此事ニ御坐候、昨今之処、熱ハ三十八度前後より九度位、脈ハ七十七八より八十前後、息三十二三より七位、尿ハ六七ヲونس、尿も一二回宛有之候、尤手当并薬料等ニ少減等も御坐候由、陳病人事兼て最前より橋本先生之診察御受候事有之候は、曾て同人より国手へも申上、御承知も被下候

事と奉存候、就てハ此節橋本先生帰朝候事ヲ承知、一応同氏ニも乞診察度病人申出候ニ付一昨日同氏来診ヲ乞候処、早速昨日来診篤と診察被致具、其診察上之意見ニおいては国手と甲乙無之、尤中井立会具因て一応国手へ右之趣申上置度、不悪御承知可被下候、実ハ一応御相談も可申上之候、患者之切望も有之旁御推察可被下候、右ニ付病状其他委細之義ハ一兩日中中井参楼、万御相談申上候様倚頼申者ニ付、右様御承知可被下候、猶書余拜趨万緒可申上候、敬具

二月三日

央 拜啓

池田先生 帛皮下

[275] 米田^{こめだ}帛^{とらお}雄の書簡

米田帛雄は明治期の軍人・官僚。天保10年肥後細川家の家老家に生まれる。戊辰戦争に功あり。宮内省出仕。侍従長、宮中顧問官歴任。子爵。大正4年没。享年77。(1839-1915)

1 明治 年9月2日 (3027)

一楮拜啓仕候、陳は残暑御見舞として些少之至ニ御坐候へ共、白紵壺反并細鱗壺籠之内進呈之仕候間、御収納被成下候ハ、難有奉存候、此段要旨迄上申如此御坐候也

九月二日

米田帛雄

池田賢台

[276] コルシェルトの書簡

コルシェルト Oscar Korschelt は明治9年東京医学校予科教場の化学・数学のドイツ人教師。東大医学部教師を経て12年11月内務省地理局へ転籍する。

1 年 月 日 (3384)

拜啓、七月十五日には報告書を提出させていただきましたが、先生がいらっしゃいませんでしたので、学校の使用人の川上氏⁽¹⁾にわたしました、敬具

O. コルシェルト

(1) 川上氏 東大独逸語助教授川上正光か。

[277] フェノロサの書簡

フェノロサ Fenollosa E.F はアメリカの東洋美術研究者。フェノロサの書簡は日本医史学雑誌第61巻第2号(2015)[9]有賀長雄の項に記載に付省略。

[278] ランゲの書簡

ランゲ Rudolph Lange は明治7年来日。東京医学校の語学・数学ドイツ人教師。明治14年11月30日満期前に解任され、横浜ドイツ病院入院。15年1月帰国した。

1 1876年(明治9年)8月29日 (3373)

拜啓、どうか私に三百ターラーを得させるような措置をお取りにならないで下さい、二十ターラーでさらに喜ぶということはありませんし、私の給料(二八〇ターラー)とシェンデル博士⁽¹⁾の分と現在されているはずの給料における差が小さくなるということでもありません、一番良いのは彼も同じだけ(二八〇)もらうということかもしれません、敬具

R・ランゲ

(1) シェンデル博士 Leopold Schendel. 明治7年より15年まで東大医学部にて数学・物理学教師を勤める。

2 1881年(明治14年)6月16日 (3370)

拜啓、このような文書が必要となる時に備えて、私の病気に関する証明書を提出させていただきます、敬具

一八八一年六月十六日

東京 R.ランゲ

(以上3通大塚恭男訳)

補 足

医師の書簡

[170] 峰 源次郎の書簡

峰 源次郎は明治・大正期の官僚・医師。弘化元年肥前伊万里の医家に生まれる。大蔵省に出仕、その傍ら大隈重信の秘書的役割を果たす。明

治24年退職，郷里にて医業に専念した。昭和6年没。享年88。（1844-1931）

1 明治 年12月24日 (939)

（封筒表） 池田先生沓包添

雉子橋大隈氏邸 峰源次郎

（封筒裏） 十二月廿四日

拝啓，然ハ先達中ハ妻子共御診察被成下，御影様ニテ兩人共速ニ全快仕，深く御礼申上候，別紙沓包聊御礼之印迄呈上仕候間，何卒御落掌被成下度奉希候，頓首

十二月廿四日

峰源次郎

池田先生 玉机下

2 明治 年3月15日 (940)

拝啓，過日ハ御高診ヲ頂キ万謝申述候，服薬後攣痛頓消大覚軽快申候，只午後ニ至レハ時々攣痛之気味有之候，左レトモ是レハ格別之事ニテも無之候間，今五六日も前方服用仕候上ニテ又々御高診御願可申上心得ニ御座候，此段右御報迄，勿々奉得貴意候也，頓首

三月十五日

峰 源次郎

池田先生侍史

3 明治 年11月7日 (941)

拝啓仕候，然ハ大隈氏隠居昨夜十一時頃例ノフサギノ証差起リ候，然シ脈搏七十四五動（平生ハ六十動）ニ相成，且ツ声音ノ様子抔ハ風邪之趣相見ヘ申候，右ニ付今朝ハ御出頭掛ニ是非々々御来診被成下度，此段御願申上候，頓首

十一月七日

峰 源次郎

池田先生 左右

4 明治 年9月18日 (942)

拝啓仕候，然ハ昨日御門人様へ御依頼申上候大隈氏内室容体，昨夜より大ニ心地よろしく御坐候故，別段 Recept 御工夫御願申上ずしてよろし□居申候間，此旨御報仕候，就ハ今朝拜趨可仕旨昨夜申上置候得共，右之都合故是又拜趨不仕候，然し大患ニいたらず例ノ証ニテ仕合申候，此段御報旁々々々

九月十八日

峰 源次郎

池田先生 御左右

5 明治 年4月29日 (943)

拝啓，然ハ小児事御影^(ママ)様ニテ平愈仕，昨今ハ全ク平生ニ復シ申候，別封ハ薄儀ながら謝儀之印ニ迄奉呈仕度御座候条，何卒御受納被成下度奉希候，実ハ自身拜趨可仕之処不得其義欠礼仕候間，是又悪しからず思召し被下度奉希候，勿々頓首

四月廿九日

峰 源次郎

池田先生 梧下

[171] マルティンの書簡

マルティン Martin Georg は明治7年来日し横浜試薬場，東京司薬場，東大製薬学科化学・製薬教師を勤める。12年11月30日契約満期による解雇。

1 1879年（明治12年）12月1日 (3375)

拝啓，百円とともに手紙を頂戴いたしました，しかしながら最後にお礼を申し上げる前にまだ処理すべき段階にある事柄の件で目にかかることを楽しみにしております，敬具

D. マルティン

2 1879年（明治12年）12月9日 (3376)

池田医長

拝啓，住居に関する池田先生からのお問い合わせに回答するにつきまして，私の解雇に関する学校からの報告が遅かったため，一月下旬以前に家を開けわたすことのできる状況ではないということをお知らせ申し上げます，敬具

D. マルティン

（上記2通大塚恭男訳）

官庁関連の書簡(その1)

- I 慶応4年3月より明治9年5月(ドイツより
帰国)まで
- 慶応4年1月末幕府医官池田謙齋は長崎精得館の塾頭としてマンズェルドに学んでいたが、戊辰戦争勃発の情報が入り身の危険を感じ長崎より上海經由横浜行きアメリカ船に乗り、無事江戸に戻った。その後養父池田玄仲(多仲・幕府奥詰医師・医学所頭取助手伝)の頼みで会津藩兵の負傷者の手当に従事した。
- 1 慶応4年3月6日 (3497)
(端裏書) 池田玄仲え
- 玄仲惣領 池田謙齋
- 両番格歩兵屯所附医師被仰付勤候、内御切米弐百俵被下候、尤陸軍奉行並可被該候
- (注) 本書簡に年月日は記されていないが、池田謙齋自筆履歴書に基づき書き入れた。以後これに準ずる。
- 2 慶応4年6月21日 (3469)
池田謙齋
- 不束之筋有之候ニ付謹慎被仰付候事
六月廿一日
行政官
行政官録事 金井文八郎
- 3 慶応4年6月23日 (3471)
池田謙齋
- 謹慎被免候事
六月廿三日
行政官
- 4 明治1年9月9日 (3473)
徳川亀之助家来 池田謙齋
- 御雇を以病院医師試補被仰付旨申渡候
九月 (軍務官)
- (注) 池田謙齋の回顧録によれば、養父池田玄仲を通じ元幕府陸軍奉行平戸石介より英人ウイリスと越後口の戦場に向うよう依頼があったが、当時病気を抱えていたので断わった。その後徳川慶喜のいる静岡に行く積りであったが、静岡では迷惑などの話があり、ところする内に先方よりの話があり大病院に勤めるようになった。
- 5 明治1年11月4日 (2012)
(端裏書) 池田謙齋様 御書付在中
大病院会計掛
- 別紙御書付壱通緒方玄蕃少允⁽¹⁾ 殿御渡ニ付、手塚良齋名代相勤御用相済申候、依之御書付相添此段御達申候、以上
十一月四日
- (1) 緒方玄蕃少允 緒方惟準。緒方洪庵の次男。明治2年1月まで大病院の取締を勤める。
- 6 明治1年11月4日 (3474)
池田謙齋
- 病院医師申付候事
十一月 (軍務官)
- 7 明治2年3月11日 (3475)
六等官 池田謙齋
- 二等医学校医師病院掛
右之通等級治定之事
三月
東京府判事
- 8 明治2年3月 (3428)
脱籍無産之者無之段申上候書附
- 池田玄仲
藤堂乗之丞触下
生国 石見 池田玄仲 已五十歳
玄仲悴

- 同断 池田謙齋 已二十八歳 右 宣下候事
門人 阿州藩 七月
生国 阿波 桂淳二 已二十歳 太政官
門人 古河藩
- 生国 下総 入沢繁二 已十九歳 14 明治2年10月10日 (3467)
門人 武蔵国横見郡 池田大学大助教
黒岩村式社神主 叙従七位
生国 武蔵 秋庭通玄 已二十歳 右 宣下候事
下部 十月
生国 尾張 喜助 已三十六歳 太政官
- 右之者脱籍無産之徒ニハ無御坐候，以上
明治二巳年三月 15 明治2年10月19日 (2617)
藤堂乗之丞触下 池田玄仲 印 御用之儀候間明廿日第十字礼服用用参朝可有之候也
辦事御役所 十月十九日 辨官
- 9 明治2年5月14日 (2622) 池田大学大助教殿
御用之儀候間明十五日巳刻参朝可有之候也
五月十四日 辦事
池田謙齋殿
追て礼服用用可有之事
- 10 明治2年5月15日 (3472) 池田謙齋
是迄之職務被免病院当直医官更ニ被仰付候事
五月 士族 触頭中
行政官
- 11 明治2年5月17日 (2623) 池田玄仲
御用之儀候間明十八日十一字出頭可有之候也
五月十七日 辦事役所
池田謙齋殿
- 12 明治2年7月25日 (2620) 池田謙齋
御用之儀候間明後廿七日巳ノ刻礼服用用出頭可有之候也
七月廿五日 辨官役所
池田謙齋殿
- 13 明治2年7月27日 (3470) 池田謙齋
任大助教
- 16 明治2年12月24日 (2084) 池田玄仲
御用之儀候間明廿五日巳之刻礼服用用出頭有之候様相達可申候也
十二月廿四日 士族 触頭中
東京府
- 17 明治2年12月25日 (3476) 池田玄仲
老衰ニ付，隠居願之通聞届候事
十二月 東京府
- 18 明治3年1月 (3432) 池田大学大助教
元百俵外十人扶持 士族 藤堂亀久雄触下
御扶助高五拾俵 池田大学大助教
禄制高九石
右私父池田玄仲義，文久二壬戌年潤^(ママ)八月七日津和野知藩事医師より徳川家十四代将軍家茂公之時被召出式拾人扶持賜，文久三癸亥年八月廿六日医学所頭取助手伝被申付，十人扶持賜り，慶応三丁卯年十二月扶持方高詰百俵外手宛十人扶持ニ成

賜、慶応四戊辰年九月分迄右高受領仕、明治元戊辰年十月十日被召出、朝臣被仰付御扶助高五拾俵下賜候、明治二己巳年十二月廿五日父玄仲家督下賜候

正月 士族 藤堂亀久雄触下
池田 一 印

19 明治3年4月9日 (2618)
御用之儀候間明十日第十字礼服用参朝可有之候也

四月九日 辨官
池田大助教殿

20 明治3年4月10日 (3477)
池田大助教

兼任少典医
右 宣下候事
四月
太政官

21 明治3年4月10日 (3431)
士族壺番組
藤堂亀久雄触下

宿所下谷和泉橋通り脇
生駒表門前 吉田千次郎
受領地之内借地 池田大学大助教
従七位守兼小典医 源朝臣秀之 当午三十歳
明治二己巳年七月廿七日被任大学大助教候宣下ヲ蒙リ、同年十月十日被叙従七位、明治三庚午年四月十日被兼任小典医候事

22 明治3年4月22日 (3499)
池田少典医
拝診之事廿二日十字

(注)『明治天皇紀』によれば明治3年4月22日大学大助教兼少典医池田謙齋拝診、又この時初めて洋方医拝診との記述あり。

23 明治3年6月14日 (2616)
御用之儀候間明十五日第十字礼服用参朝可有之

候也
六月十四日 辨官
池田大学大助教殿

24 明治3年6月15日 (3466)
池田少典医

叙正七位
右 宣下候事
庚午六月
太政官

25 明治3年6月15日 (4378)
池田大学大助教

任少典医兼大学大助教
右 宣下候事
庚午六月
太政官

26 明治3年10月22日 (2619)
御用之儀候間明廿三日第十字礼服用参朝可有之候也
壬十月廿二日 辨官
池田少典医殿

27 明治3年閏10月23日 (3479)
池田少典医
免本官並兼官
庚午閏十月
太政官

28 明治3年閏10月23日 (3486)
池田正七位
普国留学被仰付候事
庚午閏十月
太政官

(注)池田謙齋の回顧録によれば、プロシヤ国派遣の目的は医科大学の組織を学ぶようにとの事で、序でに衛生科を学んだとある。

- 29 明治3年11月2日 (2615) 士族 正七位 池田謙齋
御用之儀候間明三日第十字参朝可有之候也 右謙齋留主中ニ付代印
庚午十一月二日 辨官 謙齋父隠居
池田 正七位殿 池田玄仲
追テ過日御渡相成候宣旨持参可有之候也 八月廿九日出ス
- 30 明治3年11月15日 (2085) 第五ノ三 池田秀之
右家族のもの一名明後十七日午前第九時迄ニ戸籍
取扱ヘ出頭候様可相達候事
十一月十五日
東京府
右扱所 戸長え
- 31 明治3年12月22日 (2027) 池田玄仲
大学出仕申付候事
但大得業生准席
庚午十二月 大 学
池田玄仲
南校医局詰申付候事
庚午十二月
大学東校
- 32 明治4年6月 (3427) 小菅県管轄 下総国葛西郡行徳宿
大工 常吉三女元ぬる事 はつ
明治己巳年三月より寄留
右傭主
下谷生駒前久保丁住居
藤堂亀久雄触下
士族 池田謙齋
明治四辛未年六月
謙齋養父留守引受 池田玄仲
- 33 明治4年8月29日 (3429) 鹿兒島県管轄 士族 左近允喜衛悴
自庚午九月学問修行ニ付寄留
左近允鐘蔵
右戸主 宿所下谷久保町
藤堂亀久雄触下
- 34 明治4年10月22日 (3430) 願書
私悴謙齋義昨冬普国え留学被仰付難有仕合奉存
候，然処於留守都合有之節は別紙證書ヲ以学费之
内拝借御願可申上旨申置候，依之甚以恐入候得
共，当今於留守不得止入用之義御坐候ニ付，学费
之内三百弗拝借被仰付被下度此段偏ニ奉願上候，
以上
辛未十月廿二日 藤堂亀久雄触下
士族 池田謙齋養父隠居 留守預り
池田玄仲 印
文部省 御中
- 35 明治4年 月 日 (3433) 第三十一区 下谷生駒前久保町
家禄現米拾三石 東京府貫属士族
実父旧幕奥医師緒方洪庵亡次男
養父旧幕奥詰医師池田玄仲
明治三庚午年潤十月廿三日普国え留
学被仰付，正七位宣下ニ相成候
池田謙齋秀之^{ヒテユキ} 辛未歳三十一
養父 池田玄仲秀真^{ヒテザチ} 同 五十二
鹿兒島県士族左近允四郎左衛門亡長女
嘉永五壬子年四月廿四日娶
養母 久 同 四十三
妻 照 同 十八
長男 池田秀男秀一^{ヒテカヅ} 同 二
父玄仲次女 幾 同 十三
同人 三女 甲子 同 八
氏神 神田神社
合 七人
右之通相違無之候也
辛未 月 藤堂亀久雄触下
池田謙齋

- 36 明治6年8月12日 (3435)
 東京府貫属士族
 池田 源 秀之 謙齋
 明治六年癸酉六月 三十二歳五ヶ月
 明治元戊辰年三月六日
 一、両番格屯所医師被申付候事
 同年九月九日
 一、御雇ヲ以病院医師試補被仰付候事
 同年十一月四日
 一、病院医師被仰付候事
 明治二己巳年三月十一日
 一、二等医学校校醫師病院掛り被仰付候事
 同年五月十五日
 一、病院当直医官吏ニ被仰付候事
 同年七月廿七日
 一、任大助教宣下
 同年十月十日
 一、従七位宣下
 同年十二月廿五日
 一、父玄仲願之通隠居家督下賜候事
 明治三庚午年四月十日
 一、兼任少典医宣下
 同年六月

- 一、任少典医兼大学大助教宣下
 同年閏十月廿三日
 一、普国え留学被仰付本官兼官被免、正七位宣下
 ニ相成候事
 右之通ニ御座候也
 池田秀之留学ニ付留守心得父隠居
 池田秀 恵^(ママ)
 明治六年八月十二日
 此通貳枚、右ニ付東京府戸籍掛え出ス

[主要参考文献]

- 朝日新聞社編『朝日日本歴史人物事典』朝日新聞社
 1994年11月30日発行
 池田文書研究会編『東大医学部初代総理池田謙齋』上・
 下巻 思文閣出版 2007年2月25日発行
 大植四郎編『明治過去帳』東京美術 1971年11月20日
 発行
 中山沃著『緒方惟準伝—緒方家の人々とその周辺—』
 (株)思文閣 2012年3月30日発行
 『明治天皇の侍医 池田謙齋』発行人 高崎斐子 1991
 年7月31日発行
 日本医史学雑誌第54巻第4号 2008年12月発行
 日本医史学雑誌第55巻第4号 2009年12月発行
 日本医史学雑誌第57巻第4号 2011年12月発行
 日本医史学雑誌第61巻第2号 2015年6月発行